

科学者、JT生命誌研究館長

中村 桂子さん



「いのち」に宿る音を表現し それによって 乾いた現代社会に住む 人々を動かしたい

— 東日本大震災後、宮沢賢治の作品を
読んだそうです。

— 生命の世界を表現する。

各地で紛争や戦争が続いていますが、正しい、正しくないという判断は難しい。でも、人間同士で争っている場合ではないとは言えますよね。科学技術の粋を集めて核兵器が開発され、本格的な戦争ができないことは分かっているはずなのに。今の社会は効率優先で資源やエネルギーがどんどん使われ、地球が悲鳴をあげています。戦争は最もひどい環境破壊ですし、命が失われる。

— 「生命誌はご自身が考えた言葉です。」

地球上に生命が誕生して38億年。地球上に棲息するすべての生物はそこから生まれ同じ仲間というDNA研究を基礎にしています。これは私の恩師で生化学者の江上不二夫博士が、1970年に始めた生命科学という新分野を基盤にしています。先生は、水俣病などの公害問題の深刻化を踏まえて「環境問題は生きものの問題」と捉え、生命科学を生かす素晴らしい発想を持たれたのです。同じころ、

interview

「人間は生きものであり、自然の一部」。科学者の中村桂子さんが唱え続ける「いのち」を中心にした考え方が、改めて注目されています。JT生命誌研究館の館長を務める中村さんは、東日本大震災を機に宮沢賢治の作品を読み直し、「セロ弾きのゴーシュ」などの作品にあふれ出る賢治の生命観から「いのちの音」を感じます。そんな中村さんと絵本作家や民俗学者、探検家らがそれぞれ語り合うドキュメンタリー映画「水と風と生きもの」がこの秋、公開されました。

【聞き手・明珍美紀、写真も】

「生きものを基本に置く」 社会にしなければもつたない



「ゲノムには長い生命の歴史が書き込まれている」という



研究館の中庭で。「チョウが特定の植物に卵を産み付けるのを観察しています」

米国でライフサイエンスが誕生しました。生物学と医療を結びつけ、医療の科学技術化をしました。実は日本の生命科学も結局、米国型が主流になってしまいました。

— 本来の「生命科学」を受け継ごうと。

ゲノムという考え方が登場したとき、「これだ」と思いました。ゲノムは、生きる単位である細胞の中のDNAの総体であり、そこには生きものの長い歴史が書き込まれています。そこから、いのちの流れとつながりが見えると思ひ、生命誌の構想がまとまりました。当初この考え方を提案したときは、研究者の間でも理解してくれる方は多くありませんでした。20年余を経てゲノムの解析が進むと共に生命誌も進展しました。ゲノムが「人間を生きものとして見る」という視点を与えてくれたのですから、生きもの

— 映画では、生命誌研究館の日常も映っていますね。

館員たちは身近な生きものや細胞を見つめ、生きていることの本質を探る研究とその表現をしています。館内では遺伝子やゲノムから生きものの歴史と関係を読み解く物語や、脊椎動物の歴史を骨の比較から考察する「骨と形」などの展示、生命誌絵巻とマンダラなどで生命誌を表現しています。

— 子どもたちには何を伝えたいと。

伝えたいと言うより、子どもってすごいと思う気持ちが強いんです。孫（小学3年生）が小さかったとき、一緒に歩いていると、昆虫や鳥や花を見つけて。一番多かったのがダンゴムシ。

子どもたちは人間以外の小さな生きものに向き合っているのです。大人はそうした環境を壊さず、のびのび育つよう見守ってほしい。少し周りを見渡せば自然があり、生きものたちの営みがある。毎日丁寧暮らし、過ぎていく時間に心を止める。そういう生活をしていけば、未来が開けると思っています。

「生命誌」とは、 生きものすべての歴史と関係を知り、 生命の歴史物語を読み取る作業



ゲノムの展示の前で

中村桂子(なかむら・けいこ)さん
1936年東京生まれ。東京大学理学部化学科卒業。同大大学院修了後、三菱化成生命科学研究所に勤務。その後、早稲田大学教授などを経て、JT生命誌研究館(大阪府高槻市)の創設に関わり開設(93年)と同時に副館長。2002年4月から同館長。主な著書に「科学者が人間であること」「生命誌とは何か」など。13年、同館創立20年を記念して人形劇「生命誌版 セロ弾きのゴーシュ」をプロデュースし、自ら朗読。演出はブラハ在住の人形師、沢則行さんで今年9月にはブラハでも上演。ドキュメンタリー映画「水と風と生きもの」(藤原道夫監督)は今秋、東京のポレポレ東中野で公開。名古屋のシネマスコア(10月16日まで)や仙台の桜井薬局セントラルホール(10月17～30日)、大阪、京都などでも上映予定。



映画で対談した探検家の関野吉晴さんと(大西成明さん撮影)